



釧路校における「教職実践演習」の実践と課題 社会科グループの場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2015-06-25 キーワード: 作成者: 藤本, 将人, 内山, 隆, 酒井, 多加志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008485

釧路校における「教職実践演習」の実践と課題 - 社会科グループの場合 -

藤本 将人¹・内山 隆¹・酒井 多加志²

¹北海道教育大学釧路校社会科教育学研究室

²北海道教育大学釧路校地理学研究室

Practice and Problems in the Subject of “Practical Seminar for Teaching Profession” at Hokkaido University of Education, Kushiro campus: A Case of “Fostering the Ability to make Social-Studies Lessons”

Masato FUJIMOTO¹・Takashi UCHIYAMA¹・Takashi SAKAI²

¹Department of Social-studies Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

²Department of Geography, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨

教員養成教育において、小学校社会科の授業を設計する力を育成するにはどうすればよいのか。またそれを教職実践演習という一科目内で具現化していくにはどうすればよいのか。本稿の目的は、小学校社会科の授業を設計する能力を育成するための演習の在り方を、実践を通して論じることである。これら二つの問いに対して我々が見出した答えは、以下の通りである。①教師として働く上で実際に求められる現実的活動を選び、それを学生に経験させること。②学生の発見を実際の教材開発で必要となる視点に引き付けて解説すること。今後の課題は、題材として取り上げた土地利用に関する調査だけでなく、他の様々な視点からの野外観察を実施することである。

I. はじめに

教員養成教育において、小学校社会科の授業を設計する力を育成するには、どうすればよいのだろうか。またそれを教職実践演習という一科目内で具現化していくにはどうすればよいのだろうか。

2013年度から本格実施されたまだ歴史的には浅い教職実践演習の取組みであるが、すでに先行研究によって一定の考察が積み重ねられてきている。研究成果をまとめると、以下の2つに集約できる。

ひとつは、教職実践演習に代表される一連の教育改革の分析を通して今後の教員養成教育の在り方を考察、提案した論考である。例えば、教師教育改革を取り巻くポリティクスの分析を通して、教師の専門職性の向上、確立に向けての課題を整理した長尾の研究¹⁾、兵庫教育大学の教員養成スタンダード開発の取組みを取り上げ、教員養成の質保証を論じた別惣の研究²⁾ などがある。

もうひとつは、実践を通して教育実践演習を実施する上での課題を考察し、今後の科目運営の在り方を提案した論考である。例えば、特色ある教育活動を実施している定時制・夜間部の高校の見学を企画し、学校・教員・生徒が抱えている課題について学生がどのような学びを獲得したのかをまとめた上で、さらに効果的な学びを創り上げるため

の実施上の改善を論じた梅津・近藤の研究³⁾、国語科、家庭科の指導案の作成と授業設計に関する振り返り活動を通して、学生の保育観・授業観がどのように変化し高まったのかを探り、実践者が行った演習の有効性を論じた井口・生野・松田の研究⁴⁾ がある。

これらの研究は、教職実践演習を取り巻く教育改革の背景や、演習の具体を紹介している点で意義深い。他大学において教職実践演習を企画・立案する立場にある者にとっては、自らの実践を巨視的・微視的な視点で開発する手掛かりとなるであろう。しかし、これらの研究は、教師になってから実際に求められる現実的活動、例えば、地域調査の実施に基づく地域そのものの理解や、地域調査に基づく教材の開発などの点では、示唆される内容は少ない。

本稿では、先行研究にはない小学校社会科の授業を設計する能力を身に付ける演習の在り方を、実践を通して論じることを目的とする。以下、IIでは、教職実践演習の趣旨を2006年の中央教育審議会答申から明らかにする。IIIでは、教職実践演習に関する北海道教育大学全体での取組の概要を説明し、IVで釧路校・学校カリキュラム開発専攻・社会科グループの取組みを紹介する。Vで学生の学びの実際を示し、VIで今後の課題を示すこととしたい。

(藤本将人)

II. 科目「教職実践演習」の趣旨

2006年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、「教職実践演習」の趣旨が以下のように述べられている。

「教職実践演習は、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標に照らして最終的に確認するものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される」(下線は筆者による)

ここで言う「教員として最小限必要な資質能力」とは何か。平成9年の教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代にに向けた教員養成の改善方向について」では、以下のよう

に述べられている。
「教員の『資質能力』の意味内容を『専門的職業である「教職」に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能等の総体』ととらえ、さらに、養成段階で修得すべき『最小限必要な資質能力』を『採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導・生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力』とする」(下線は筆者による)

こうした資質能力が形成されたかを確認するために、「教職実践演習」が設定された。学生はこの科目の履修を通して、自己の課題をとらえ、不足する知識や技能を補うことで、教職生活を円滑に始められるようにする。一方、課程認定大学にとっては、教員養成で目指す資質能力の質保証が求められることとなった。

(内山隆)

III. 北海道教育大学における「教職実践演習」

北海道教育大学でも、上記の趣旨を踏まえて、教職実践演習全学運営委員会で「教職実践演習」の実施に向けた検討が行われた。

実施要項によれば、「授業では、4年間の教職課程の履修や教育実習を全般的に振り返り、教員として求められる以下の4つの事項をテーマに、各自の達成度や課題を洗い出し、不足している知識や技能を補うことで、教育現場で働くための最終準備を行う」とされ、以下の4つのテーマが示されている。

- ①教科、保育内容等の指導力に関する事項
- ②幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- ③社会性や対人関係能力に関する事項
- ④使命感や責任感、教育的愛情に関する事項

授業方法の主なポイントは、次の通りである。

- ・演習を中心とすること。
- ・教職に関する科目の担当教員と教科に関する科目の担当教員が複数人で協力して行うこと。

- ・学生のこれまでの教職課程の履修履歴を電子ポートフォリオ等により把握し、それを踏まえた指導を行うことにより、不足している知識や技能等を補うものとする。
- ・学生に自己の課題を自覚させ、主体的にその解決に取り組むことを促すため、役割演技(ロールプレイング)、事例研究、現地調査(フィールドワーク)、実践記録の作成等の工夫をすること。
- ・学校現場の視点を取り入れる観点から、必要に応じて現職の教員または教員勤務経験者を講師とした授業を含めること。
- ・連携先の確保や授業計画の立案に当たって、当該教育委員会または学校の意見を聞くことが望ましいこと。

授業内容の主なポイントは、次の通りである。

- ・授業内容は、パターン1(模擬授業・ロールプレイ・事例研究型)とパターン2(実務実習型)のいずれか、あるいは両者の混合型から、キャンパスごとの状況に合わせて適宜選択・組み合わせる。
- ・15時間をガイダンス、活動計画、授業演習・実習、中間報告、生活指導演習・実習、総括の枠組みを目安にして計画する。
- ・全体を通じて電子ポートフォリオ、チェックリストの観点を有効に活用する。

以上を踏まえたパターン1(模擬授業・ロールプレイ、事例研究型)の授業計画例は次のようになる。

- 1 時間目:ガイダンス(担当:科目全体担当者、各専攻グループ等代表者)
- 2 時間目:学びの履歴の整理、課題克服のための取組計画(担当:アカデミックアドバイザー、以下AAと表記する)
- 3~12時間目:取組計画の発表と助言(担当:専攻各教員・AA)、各学生の課題に即した模擬授業、ロールプレイ、事例研究と討議(担当:専攻各教員、AA)、適宜中間報告や中間指導、記録整理(担当:AA)
- 13 時間目:活動を受けたレポート案(4つの観点の課題克服についての省察を含む)の作成・指導(担当:AA)
- 14~15時間目:整理を踏まえた実践レポートの発表・討議等、電子ポートフォリオへの自己評価と省察結果の入力、アカデミックアドバイザーの評価コメント入力(担当:AA)

北海道教育大学で定めた指針をもとに、釧路校では、上記のポイントを踏まえて教職実践演習運営ワーキンググループを中心に、各専攻、分野、グループで演習プログラムを用意し、学生が自らの課題に応じて選択できるようにした。

(内山隆)

IV. 釧路校・学校カリキュラム開発専攻・社会科グループの取り組み

1. 内容・方法の検討

社会科グループでは、数回の会合を開き、教職に関する

科目の担当教員と教科に関する科目の担当教員が協同で取り組めるプログラムを検討した。そして、2013年度は身近な地域のフィールドワークを取り入れた小学校社会科の授業づくりを行うことにした。

実践の概要を説明するにあたり、まずは小学校社会科の授業づくりを教育内容として取り上げる際の基本的な考え方を示しておきたい。加えて、教育方法として採用した野外観察の基本的な考え方も示しておくこととする。

教職に関する科目の担当教員と教科に関する科目の担当教員が共通の基盤とした考え方は以下に示す①②の通りである。

①小学校社会科における内容・方法

小学校では、新卒教員は中学年を担任することが比較的多い。だが、授業実践上、第3学年及び第4学年の社会科は、難易度が高いと言える。

なぜなら、学習の対象が地域社会の社会的事象を対象とするものであり、教師自身が地域に出かけて教材研究を行い、指導案作成をする力量が求められるからである。

学習指導要領の社会科で取り上げられる第3学年及び第4学年の具体的な内容項目は、以下の6つである。

- ア 身近な地域や市の地形、土地利用、公共施設などの様子
- イ 地域の生産や販売に関わっている人々の動き
- ウ 地域の人々の健康な生活や良好な生活環境を守るための諸活動
- エ 地域の人々の安全を守るための諸活動
- オ 地域の古い道具、文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人の具体的事例
- カ 県の地形や産業、県内の特色ある地域

これらの内容については、それぞれ単元化して学習展開を図るが、相互に関連性をもっており、地域の実態を踏まえて2年間を見通した指導を行う必要がある。

そこで、演習では社会科の導入単元を取り上げ、何をどのように指導すれば良いか、学生がフィールドワークを通して学び、授業の計画・実践に生かせるようにした。

学習指導要領で対応する内容は、「(1)自分たちの住んでいる身近な地域や市(区、町、村)について、次のことを観察、調査したり白地図にまとめたりして調べ、地域の様子は場所によって違いがあることを考えるようにする」である。

ここでは、学校の周りの児童が直接観察できる範囲の特色ある地形や土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物などを調べ、地域の様子は場所によって違いがあることを考えるようにすることが求められている。

『小学校学習指導要領解説社会編』によれば「特色ある地形」は、「土地の低いところや高いところ、広々と開けた土地や山々に囲まれた土地、川の流れているところや海辺に面しているところなど」である。「土地利用の様子」は、「田や畑の広がり、住宅や商店、工場の分布など」である。

「主な公共施設など」は、市(区)役所や町(村)役場をはじめ、学校、公園、公民館、図書館、児童館、体育館、美術館、博物館、郷土資料館、文化会館、消防署、警察署、裁判所、検察庁などや「駅、病院、福祉施設、デパート、スーパーマーケット、銀行など、多くの市民が利用している施設」である。

「交通の様子」は、「主な道路や鉄道などを取り上げ」、「身近な駅やバス停とその周りの様子の観察、調査」、「電車やバスなどの路線図や時刻表を手掛かりに」して、「自分たちの住んでいる地と近隣の市との結び付きに気付く」ようにする。また、「主な道路と市内の工場の分布、主な駅と商店の分布など、土地利用の様子を交通の様子と関連付けて考え、相互のかかわりに気付く」ようにするとなっている。

「古くから残る建造物」は、今回の改定で新たに追加されたものである。建造物は、例えば「神社、寺院、伝統的な家屋など」であり、「地域の特色に応じて、門前町、城下町、宿場町などの伝統的な家並を取り上げることも考えられる」とされている。

いずれも、児童が観察、調査したり地図などを活用したりして具体的に調べ、白地図に書き表すようにする。その際に、内容の取扱いとして新たに「方位や主な地図記号について扱うものとする」が加わり、地図指導が一層重視されるようになった。

こうした学習を通して、学習指導要領の第3学年及び第4学年の「目標」の「(3)地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする」という能力の育成が求められている。

以上の内容と目標をフィールドワークに位置付け、児童の学びとしていかに展開していくべきかを学生に考えさせることを今回の演習では重視することとした。

(内山隆)

②地理学における野外観察

地理学者は野外に出ると元気になる、とよく言われる。これは地理学者が研究するにあたって野外調査を第一としていること、すなわち野外調査なくして地理学はありえないことを意味している。地理学が野外科学と言われる所以である。地理学における野外調査の方法は大きくアンケート法、聞き取り法、直接観察法の3つに分類することができる。2013年度の教職実践演習で行った野外観察は直接観察法に含まれるが、この野外観察は地理学にとって最も基本的な調査法である。野外観察では観察者の目の前に広がる様々な自然的事象、人文的事象をまず観察し、その諸相を正しく把握することが求められる。そのためには鋭い観察力(観察眼)が必要とされる。さらに観察した結果を地図上に記録し、レポートとしてまとめる能力が求められる。観察眼や記録する能力は一朝一夕で習得できるもので

はなく、経験と適切な指導によって習得できるものである。

ところで、野外観察にはこれまで学んできたものを実際に野外に出て確認するという役割もあるが、野外に出て新たに何かを発見するということがより重要である。その際、前述した観察眼が特に求められることになる。このことは研究だけではなく地理教育の場においても言えることである。そこで2013年度の教職実践演習では、まず受講生に野外観察とはどのようなものであるのかを体験してもらうこととした。

(酒井多加志)

③調査対象地域と調査区の画定

受講生数は13人であったため、3人組の班3つ、4人組の班1つの計4班に分けた。調査対象地域は学生にとって身近な地域である北海道教育大学釧路校周辺とし、各班の調査地域の範囲は過去の地理学実習での土地利用調査の経験に基づいて画定した⁵⁾。すなわち、初めて土地利用調査を行うものにとって、1時間あたり200m×400m程度の範囲であれば調査は可能である。今時の調査では調査時間を2時間確保しているため、上記の倍の面積である400m×400m程度を調査範囲とした。第1図にこの基準をもとに設定した4つの調査区を示す。釧路校を中心に北東の緑が岡1丁目付近がA区、北西の城山1丁目付近がB区、南西の住吉2丁目付近がC区、南東の鶴ヶ岱1丁目付近がD区である。

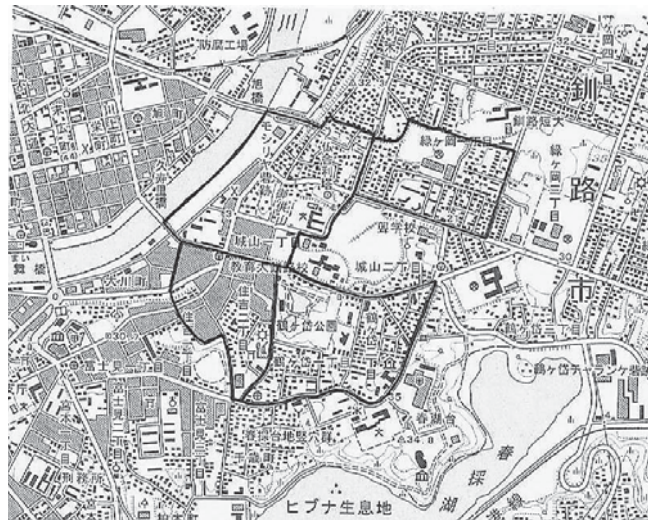
受講生の希望をもとに各班の調査区を決定した後、各班に全調査区を示した第1図1枚と各々の班の調査区を示した縮尺2,500分の1の国土基本図2枚を配布した。配布した国土基本図のうち1枚はまち歩きの中で観察した各種情報を自由に書き込むためのものであり、もう1枚は発表用のものである。なお、国土基本図とは国土地理院が測量し作成する縮尺2,500分の1または5,000分の1の地図のことで、国土の開発と保全を目的としている。市町村役場もしくは財団法人日本地図センターのHPにおいて購入が可能である。ただし、刊行は平地や都市及び都市周辺部に限られ、山間部や離島など人口密度の低い地域では刊行されていない。

参考までに、本講義で使用した地図を下に示す。

1:25,000地形図「釧路」(平成20年更新)

1:2,500国土基本図XⅢ-NE 72-4(釧路市現況図P-4)(平成18年測量)

1:2,500国土基本図XⅢ-NE 73-3(釧路市現況図Q-3)(平成19年測量)



第1図 調査対象地域 (×0.8)

(酒井多加志)

④土地利用調査の対象

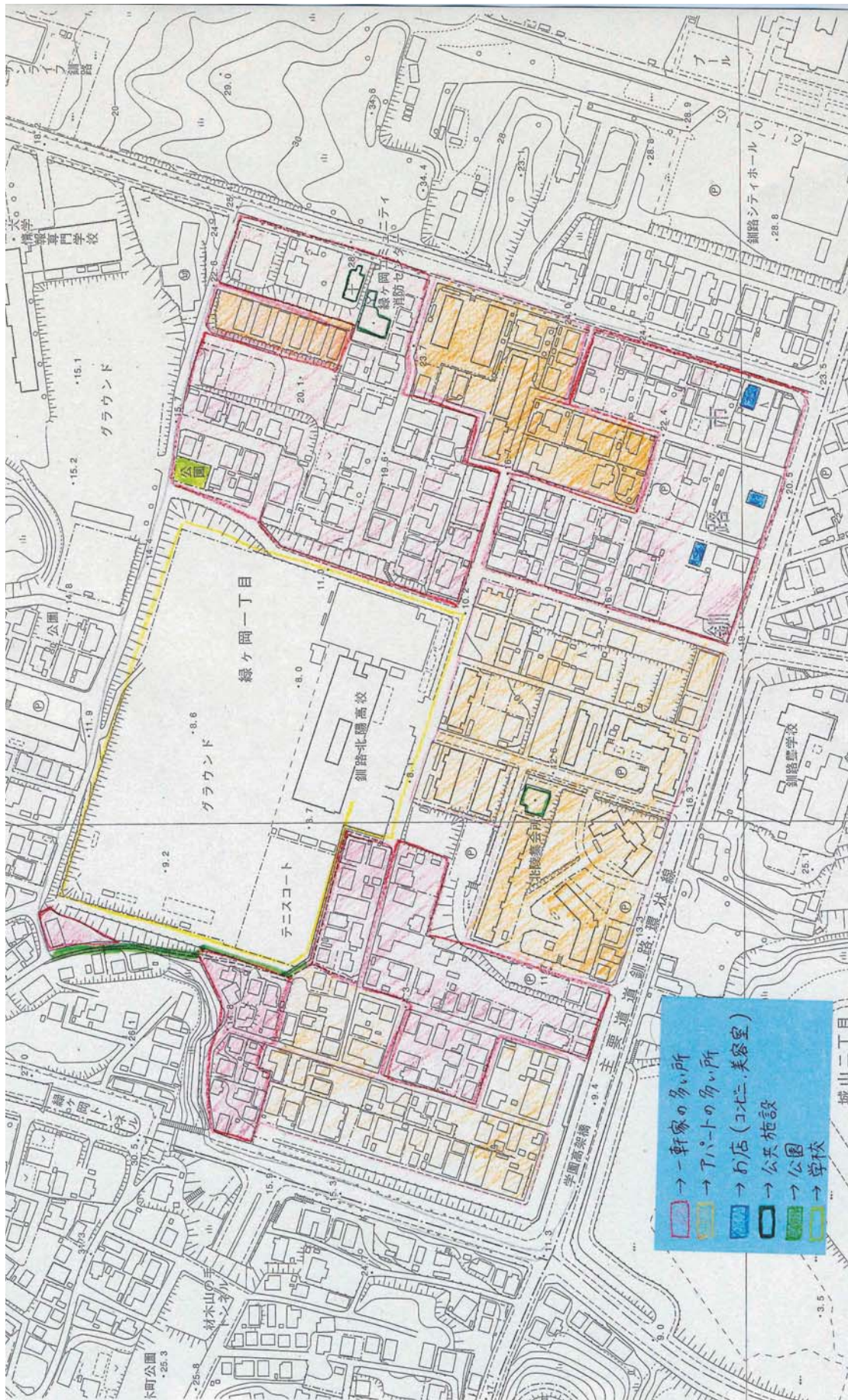
受講生には土地利用(建物用途)の凡例については、事前に示すことはせずに、各班で判断するよう指示した。あわせて、土地利用以外にも気づいたことはできるだけ多く書き留めるよう指示した。これは(1)受講生に観察眼を身につけてもらうこと、(2)受講生がまち歩きをするにあたって何に注目しているかを知ること、を目的としている。(1)に関しては、もちろん本講義のみで身につくものではないが、与えられた凡例に従って受動的に調査するよりも、より観察する力が身につくものと考えられる。

(酒井多加志)

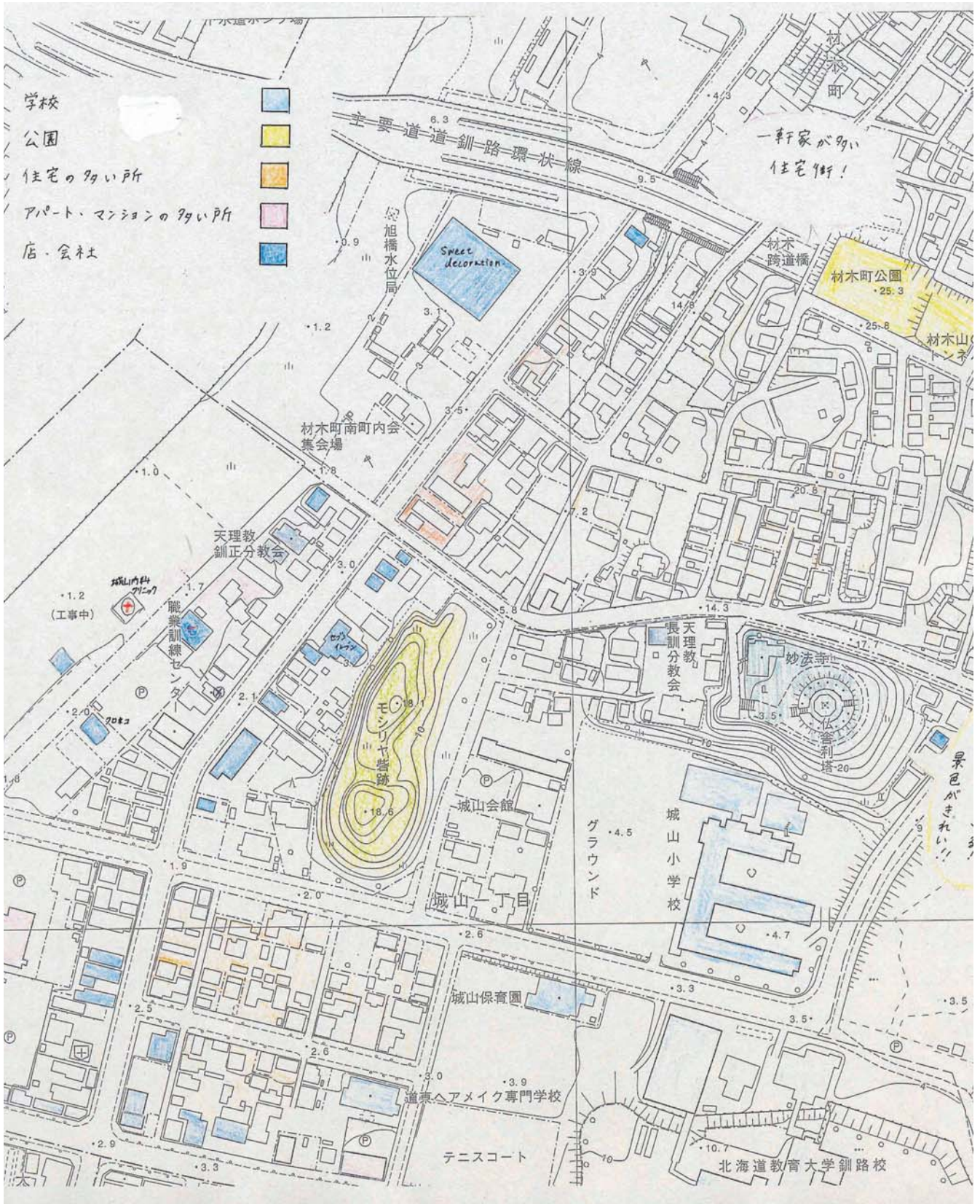
2. 教職実践演習の概要

社会科グループが実施する2013年度の教職実践演習のテーマは“小学校社会科「身近な地域」の授業作り”とした。

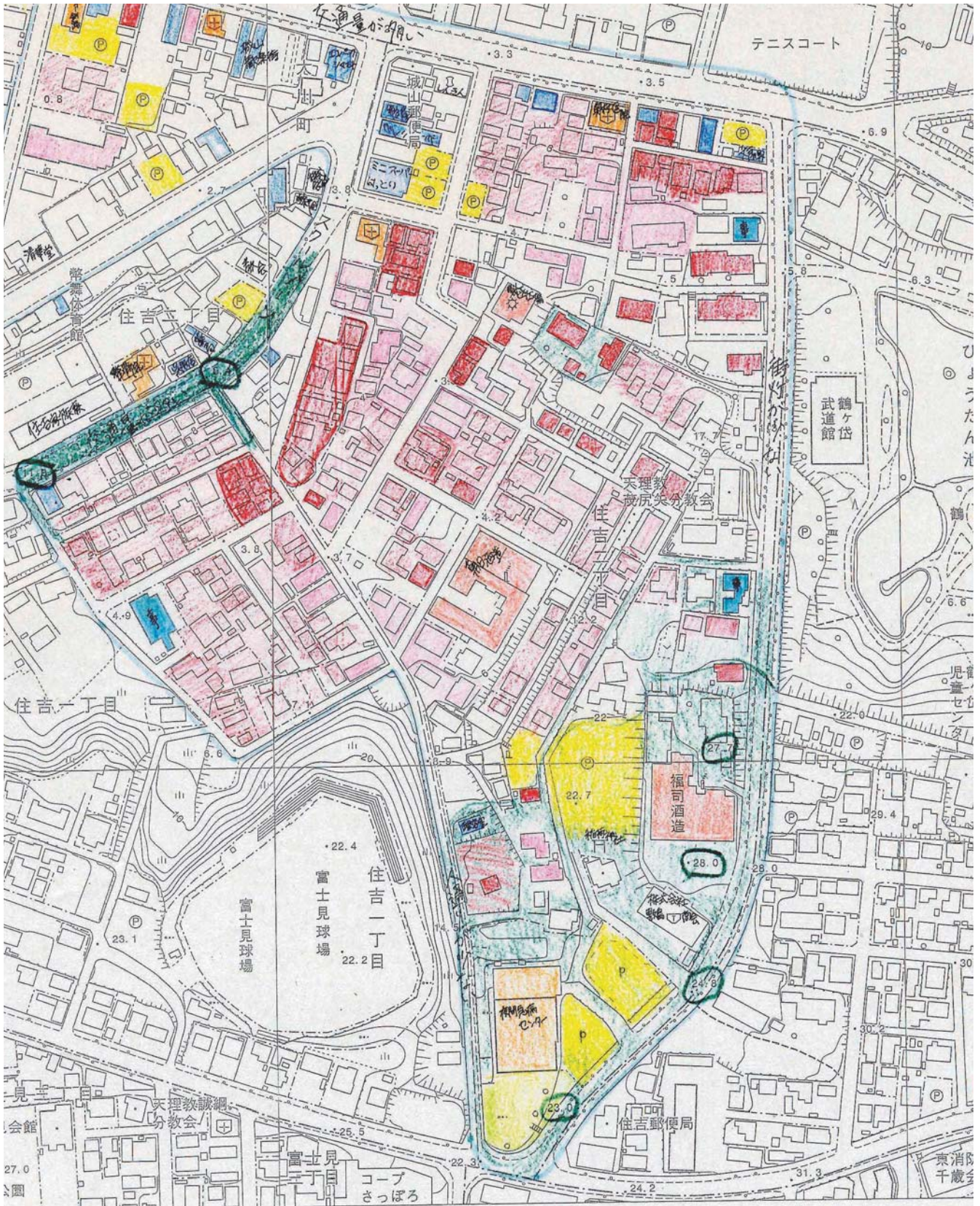
まず、教科教育学担当教員から、前に述べた学習指導要領上の位置付け(ねらい,内容,方法)について説明した。さらに、それが児童の学習活動としてどのように展開されているか、地図としてどのように表現されているかについて、教科書を見ながら確認をした。



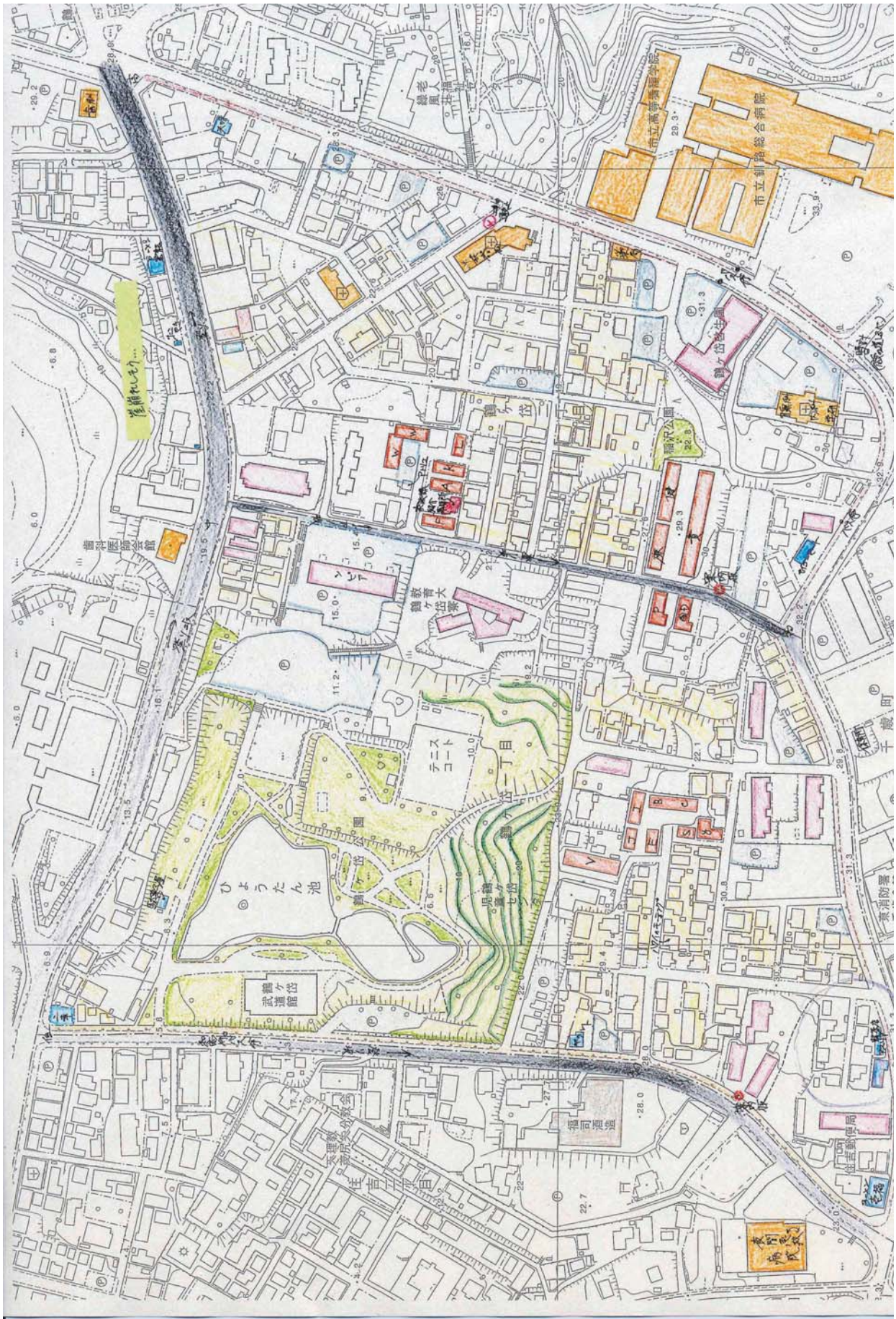
第2図 1班(A区)の土地利用図(×0.7)



第3図 2班 (B区) の土地利用図 (×0.7)



第4図 3班 (C区) の土地利用図 (×0.7)



第5図 4班 (D区) の土地利用図 (×0.7)

続いて、具体的な野外観察を通じて「身近な地域」の土地利用図を作成するとともに調査結果を発表する、という活動を行った。実施日時は10月18日（金）9:00～14:30、11月8日（金）13:00～17:50で、両日とも講義内容は同じである。受講者数は10月18日が13名、11月8日が7名であった。本稿では受講者数の多かった10月18日の講義を紹介する。なお、講義には社会科グループの教員全員（7人）がかかわることとした。

講義は次のように進めた。

- 9:00～9:20 小学校社会科の指導要領における身近な地域の取り扱いについての解説
- 9:20～9:40 土地利用調査の説明
- 9:40～12:00 土地利用調査の実施（移動時間を含む）
- 12:00～12:30 昼食
- 12:30～13:45 土地利用図の作成と発表準備
- 13:45～14:30 発表

（酒井多加志・内山隆）

V. 学生の学びの実際

第2, 3, 4, 5図は、学生の具体的な学習成果である。学生は、地域調査を行って発見した内容を地図上に確定していった。第2図は1班、第3図は2班、第4図は3班、第5図は4班のそれを示している。学生は、「一軒家の多いところ」「アパートの多いところ」「お店」「公共施設」「公園」「学校」といった視点でまち歩きを行った。

地図上に確定した学びを整理したものが、以下の表である。表は、学生の発表内容をもとに作成を行った。学生の発表は主に「着目した事物」「分布」「土地の様子」「特記事項」で表現されるカテゴリで分けることができた。

1班は公共施設や街の移り変わりについて興味を持ち、

2班は特色ある地形や土地利用、交通、まちの移り変わり、古くから残る建造物についての発見が多かった。3班は防災安全や、子育て、高齢者・福祉施設、産業に関する知見が多く、4班では産業、住民、交通、市に関する見方を獲得したようである。

学生発表の後、地域調査による学生の発見が小学校社会科の教材開発の観点にどのように合致しているのかという視点から、教員がコメントを返し、今後学生が教員として授業を設計するために必要となる「深める視点」を確認していった。

（藤本将人）

VI. 今後の課題

本稿の目的は、小学校社会科の授業を設計する能力を身に付ける演習の在り方を、実践を通して論じることであった。最後に、「I. はじめに」で掲げた二つの問い、すなわち、教員養成教育において、小学校社会科の授業を設計する力を育成するにはどうすればよいか、またそれを教職実践演習という一科目内で具現化していくにはどうすればよいか、について答えを提示しておきたい。

一点目について、我々が見出した答えは、教師として働く上で実際に求められる現実的活動を選び、それを学生に経験させるというものである。今回の演習では、小学校社会科の授業を設計する上で必須の力となる地域調査について現地体験という方法を採用し、実際に調査を行った。この経験から学生が見つかったことは多かった。

二点目について、我々が見出した答えは、学生の発見を実際の教材開発で必要となる視点に引き付けて解説することである。教職課程全体を通して教員としての資質を育成するわけであるが、その資質が身についたかどうかを学生

表 学生の発表内容

	着目した事物	分布	土地の様子	特記事項	コメント内容 (深める視点)
1班	北陽高校／公園／学園高架線／コミセン／教会／ツルの置物	住宅地（1軒家）		住宅地の中に高校	公共施設 移り変わり
2班	城山小／商店／セブン・イレブン／モシリヤ／仏舎利塔／スイートデコレーション／空き店舗／公園（道路下 ブランコ1つ）	高級住宅街（1軒家）	高い土地 川沿い	高い所から見渡す 道路沿いに会社公園 が少ない	特色ある地形 土地利用 交通 移り変わり 古くから残る建造物
3班	ランチマーケット／酒蔵／スクールゾーン／公園（療育センター専用）／公園（草むら）／教会／病院・薬局／製缶工場と段ボール	店が多い／交通量／1軒家／アパート	高低差	商店の多さと交通量	防災安全 子育て 高齢者・福祉施設 産業
4班	福司／喫茶店／案内板／パークサイド19棟	1軒家／アパート、マンション／交通量／紺の屋根が多い	坂	ナナカマド＝市の木 パワースポット	産業 住民 交通 市

（発表の内容をもとに、内山隆が作成）

自身にメタ認知させるためには、科目内において「身につけている」という自覚を覚醒させることが必要であろう。今回の演習では、教員からのコメントがその役割を果たしていたということができよう。

最後に今後の課題を述べておきたい。今年度の教職実践演習では野外観察の一事例として土地利用を取り上げたが、その他にも防災や防犯、交通安全、都市景観、高齢者や障害者からみた都市問題等、他にも様々な視点からの野外観察が可能である。今後はこれらに取り組みさらに学生の経験を発展させていくこととしたい。

(藤本将人)

【註】

- 1) 長尾彰夫「教師教育改革のポリティクス分析－教員養成大学の在り方を通して－」日本教育学会『教育学研究』第80巻, 第4号, 2013年.
- 2) 別惣淳二「教員養成の質保証に向けた教員養成スタンダードの導入の意義と課題－兵庫教育大学の事例をもとに－」日本教育学会『教育学研究』第80巻, 第4号, 2013年.
- 3) 梅津徹郎, 近藤健一郎「教職必修科目「教職実践演習」の取り組みをふりかえって」『北海道大学教職課程年報』第4号, 2014年.
- 4) 井口眞美, 生野金三, 松田典子「教職実践演習の実証的研究－保育観・授業観の形成を志向して－」実践女子大学『生活科学部紀要』第50号, 2013年.
- 5) 平成22年度の地理学実習では洞爺湖温泉街の土地利用調査を, 平成24年度の地理学実習では余市町の中心市街地の土地利用調査を実施した。

【参考文献】

- 伊深祥子「教職実践演習（家政教育講座家政専攻）の成果と課題－初年度（2013年度）の授業づくりとカンファレンスの実施から－」『愛知教育大学家政教育講座研究紀要』第43号, 2013年.
- 織田栄子「教職実践演習におけるグループアプローチの活用と効果について」『聖霊女子短期大学紀要』第41号, 2013年.
- 香川晴美, 鈴木正和, 伊藤潔志「保育者の専門性としての発表能力とその育成－「保育・教職実践演習」を核とした科目間連携に向けて－」『山陽学園短期大学紀要』第44巻, 2013年.
- 檜田健志, 高旗浩志, 江木英二, 曾田佳代子, 三島知剛, 後藤大輔, 加賀勝「全学教職課程における「教職実践演習への取組」－教科専門科目担当教員の意識に着目して－」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第3号, 2013年.
- 檜田健志, 高旗浩志, 三島知剛, 江木英二, 曾田佳代子, 後藤大輔, 佐藤大介, 山根文男, 加賀勝「全学教職課程における「教職実践演習への取組」(2)－試行の成果と課題及び本格実施の実際－」『岡山大学教師教育開発セ

- ンター紀要』第4号, 2014年.
- 高橋伸夫・溝尾良隆編『地理学講座6 実践と応用』古今書院, 1989年.
- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申)文部科学省, 2006年.
- 永田成文「授業実践力の育成をめざした教育実習後の教員養成教育の一試案－教職実践演習を見据えた社会科における隣接学校園との連携－」『大学教育研究 三重大学授業研究交流誌』第20号, 2012年.
- 中村和郎・高橋伸夫編『地理学への招待』古今書院, 1988年.
- 梨木昭平『教職概論・生徒指導論－「教職実践演習」対応－』大学教育出版, 2011年.
- 梨木昭平『教職実践演習－ロールプレイ・ロールレタリング対応－』大学教育出版, 2012年.
- 西岡加名恵, 石井英真, 川地亜弥子, 北原琢也『教職実践演習ワークブック－ポートフォリオで教師力アップ－』ミネルヴァ書房, 2013年.
- 日本教育方法学会編『教育方法42 教師の専門的力量と教育実践の課題』図書文化, 2013年.
- 北海道教育大学『フォーラム2010 教職実践演習に向けたカリキュラム開発』大学改革推進事業「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)－往還型カリキュラムによる教員養成の改善－」報告書, 2010年.